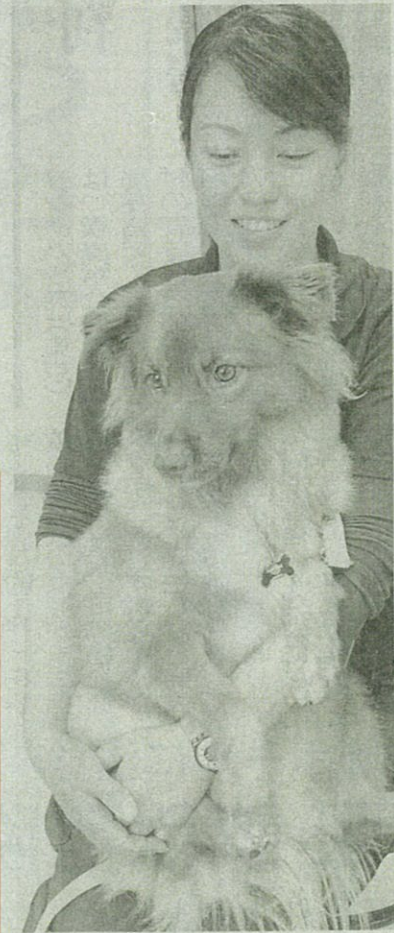


飯館から伊丹へ セラピー特訓中

セラピードッグを目指す「そら」。抱えているのは飼い主の今井雅子さん。兵庫県伊丹市で



古里癒やす犬

東京電力福島第一原発事故で避難を余儀なくされた福島県飯館村の住民から引き取られた雑種犬の子「そら」（雌、4歳）が、兵庫県伊丹市のNPO「日本レスキュー協会」で、被災者らの心をなごますセラピードッグの修業を積んでいる。既に東北の被災地に向き、人気を集めている。被災地では飼い主がいなくなった犬が処分されるケースもあるといい、同協会は「その活躍が他の犬を救うことにつながれば」と期待する。

【加藤敦久、写真も】

テストを受けさせてみると見事に通過。指示をきちんと聞き、触れ合う相手に不安を与えないなどの訓練が続いている。

昨年11月には宮城県気仙沼市、今年3月には仙台、石巻両市の仮設住宅を、セラピードッグの「研修生」として訪問。お年寄りや子どもたちに囲まれた。飯館村出身と知った被災者が「おまえも大変だったね」と声をかけ、やさしく頭をなでて、語りかけてくれたという。

同協会は阪神大震災がきっかけで発足。レスキュー犬以外に、高齢者や被災者らが抱きしめたり、触ったりすることで癒やされるセラピードッグも養成している。

東日本大震災から2カ月後の2011年5月、同協会は避難所に連れて行けなくなった犬を一時的に預かる保護活動を実施。その母親「もも」は保護された10頭のうちの1頭だった。ももは妊娠しており、兵庫県に到着した3日後、4頭を産んだ。5頭とも引き取り手が現れ、そらは、協会でボランティア活動をしていた大阪府箕面市の今井雅子さん（38）が育てることになった。

そらは穏やかな性格で、今井さんがその長所を見込んで3歳の時にセラピードッグ適性に